

「赤き黄土く来民開拓団」に学んで

御岳小学校 6年 成瀬 友哉



ぼくたちは、総合学習で、来民開拓団の学習をしました。日本の国土はせまく、人口は多い。そのうえ資源にもとほしい日本は不況のどん底から抜け出すために、中国侵略の道を選びました。戦争を起し、「満州国」をつくった日本は、その支配を強めるために、日本国内の貧しい農民達や部落の人々を、開拓団として、強制的に中国に連れて行きました。その中で熊本県からただ一つ特別に選ばれたのが「来民開拓団」でした。

開拓団の話を読んだとき、すみ子さんのお父さんとお母さんは悩みました。三日三晩話し合いました。すみ子さんのお父さんとお母さんも朝から晩まで必死で働いているのに、

暮らしてはきついばかりでした。「子どもたちには、もっと楽な暮らしをさせてやりたい。」とあって、すみ子さんの家族も中国へ行くことを決めました。

来民開拓団の人たちが入植した土地は、中国の人たちが耕し、住んでいた土地でした。日本が、その土地や家を、安い値段でむりやり買上げました。そして、泣き叫ぶ中国の人々を力ずくで追い出し、その後開拓団の人たちを入れたのです。ぼくは、その土地は中国の人たちのものと知っていたいながら、開拓団の人たちには何も教えずに、そこにつれていったのがおかしいと思いました。

「開拓団は全員となりの村に逃げなさい。」という知らせが来ました。しかし逃げる前に二つの村の人たちが中国人に襲われてしまいました。1945年8月15日の事でした。この日が終戦の日でした。この日が終戦の日であることを、開拓団の人たちは、誰も知りませんでした。僕はそれがおかしいと思いました。

開拓団の人たちは、「全力で戦おう。もしも負けそうになった時は、全員自分たちで死のう。」と、つらい決心をしました。そして、中国の人たちが襲ってきて、開拓団の人

ちは必死で戦いました。けれど、とうとう全員自決することになりました。すみ子さんのお母さんも、泣きながらすみ子さんに毒薬を飲ませ、刀を自分の胸に突き刺して死んでいきました。ぼくは、お母さんはすみ子さんを殺したくなかっただろうと思いましたが、こうして、すみ子さんたちだけでなく、275人全員が亡くなっていたのです。そして、すみ子さんのお父さんが、開拓団の最後を日本に伝える役目でした。すみ子さんのお父さんは、たった1人で生き残って開拓団の事を伝えるのは、どんなにつらかったらうと思いましたが、

中国の人たちの中には、開拓団の人たちの逃げる準備を手伝ってくれたり、中国人が襲ってくることをこっそり教えてくれる人がいました。もし、そのことが他の中国人に分かったら、自分が殺されるかもしれないのに、命がけで教えてくれたのがすごいと思いました。けれど、日本は、開拓団の人に本当のことを何も教えませんでした。もし、戦争に負けたことや戦争が終わったことが知らされていたら、死ななくてすんだかもしれないと思いました。

るとき「その村は…」と言われ、ずっと差別を受けていたから、中国に行ったら差別されなくなると思っただけで、ぼくは思いませんでした。自分のふるさから遠くはなれなければならぬほど、差別がひどかったのだと思います。けれど、中国に行くと、日本は開拓団の人たちの命を大事だとは思っていません。来民の人たちが日本に差別されていなくなったら、中国に行くこともなかったし、全員死ぬこともなかったのだと思います。部落差別が、来民開拓団の人たちの命を奪ったのだと思います。

「森のなかまをべんきようして」

大野小学校 2年 後藤 彩花



わたしは、森のなかまをべんきようして、一番おかしいと思ったことは、ライオン裁判長が足あとを見ているのに、うさぎのみみすけときめつけてばつをあてたことです。

ボンきちの言うとおりにしたのがおかしいです。足あととは、いつばいあったのにボンきちがうさぎのみみすけにちがいないと言いました。ほかのどうぶつがそこに行つて食べものをとつたかも知れないのにきめつけたからちゃんとしらべたほうがいいと思います。学校でも同じようなことがあります。上きゆう生からきめつけられていやな気持ちになりました。わたしは、ちがうよと言つたけど、声が小さかったからその人には、聞こえませんでした。そぎ言われた時は、大きな声で言いたいです。

ぶつと思いました。みみすけのためにさいばんをやりなそう、と言つたのがいと思いましたが、みみすけが、さいよはないていたけど、さいごは「まちがったことにはまけないぞ。」と言つたことがすごいなと思います。わたしのみみすけみみすけに、まちがったことにはまけないです。わたしや友だちがもしきめつけられたら、やめてとか、きめつけんと、はつきり言つていきたいです。

「自分の心とのたたかい」

馬見原小学校 5年 田中 愛美



わたしは、人権学習で、「ぼくのがんばりわたしががんばり」という、差別をなくすために解放子ども会の人たちが書いた、壁画を見に行きました。中村先生に壁画のことをわたくし教えてもらいました。わたしが壁画の中で心に残つたが

の女の子が弟や妹を連れてきて、人がなると言っても負けない気持ちでリボンに表して、そのリボンを毎月23日につけて登校するというのがリボン登校でした。心ない人たちにいرونなことを言われてもかまわずリボン登校をしつづけるのは、えらいと思えました。リボンに人がなると言っても負けない気持ちを表していることが、しつかり伝わってきました。

わたしは、今まで水をかけられたり、キックをされたり悪口を言われたことがたくさんあったけど、「せんで。」と言った。その友だちは、お母さんが仕事をやめさせられたというのを勇気をもつて発表してくれた。そして、差別をなくす集会、5・23集会に4回行って来たそうです。わたしは一度でもいいので、行ってみたい。

「これ、わたしのけしゴムばい。」と、言つてけしゴンをとりました。わたしは、年上なので注意するのがとてもこわかったです。でも、勇気をふりしぼつたその子に注意しませんでした。わたしは全然きいてくれませんでした。わたしは何回も注意しました。そしたら、「うるさい、かえせばいいんですよ。」

これからは、いやなことをされたら、勇気をふりしぼつて、「せんで。」と言いたい。無視されても、リボン登校をやつてきた人が何と言つても負けない気持ちでしたように、「自分にされたら、どんな気持ち？」と、言い続けたいです。